
人生で得る宝物の数は沢山

小豆久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生で得る宝物の数は沢山

【Nコード】

N22960

【作者名】

小豆久遠

【あらすじ】

銀さんお誕生日おめでとう!!!
って事で小説書いちゃいました
2話の中編です。

過去捏造注意!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

家族は生涯の宝物（前書き）

相変わらずグダグダで申し訳ない…orz

家族は生涯の宝物

朝、日差しの眩しさと目が覚めた。

自発的に起きたのはいつぶりだろうかと思いつながら欠伸をした銀時は、時計を手に取り寝呆け眼でそれを見た。

驚いた事に、時計はまもなく11時を指そうとしていた。

道理で目が覚めたわけだ。

下手をしたら半日を寝て過ごすところだった。

ここで疑問なのは、万事屋の雑用の存在である。

いつもなら、万事屋の雑用こと新八に嫌でも8時頃には起こされていた。

なのにどうした事だろう。

取り敢えず銀時は寝巻からいつもの着流しに着替えて、寝室から居間に向かった。

やっぱり新八の姿はなく、しんと静まりかえっている居間。

銀時はため息を零しながら押し入れの襖を開いた。

神楽専用の寝室である。

「おーい、起きろー。今何時だと思っ…て、アレ？」

寝室はもぬけの殻だった。神楽はおるか、下の段で狭そうに寝ているはずの定春までいない。

「神楽ちゃん？定春う！」

銀時は二人（一匹？）の名前を呼びながら家中を探したが、見つかることはできなかった。

「ったく…」

ふと、机の上に目をやると一枚の紙切れに気が付いた。

それにはたどたどしい字で、定春と遊びに行つて来るといった内容が書いてあった。

しかし、肝心な行き先が書いてない。

「出かける時は行き先も書けつて言つただろーが…」

受取り人不在の不満をボソリと呟いた銀時は、紙切れを元の場所に戻すと社長椅子にどかりと腰を下ろした。

二人がいないだけで大分静かに感じる我が家。

昔はそれが当たり前だったのに、今となつてはとても耐える事ができない。

アイツらには色々貰つてばっかだな…。

自分はそれに釣り合うだけの事をあの二人にしてやれているだろうか…？

外の喧騒や車の音を聞きながら、銀時は珍しく焦燥感に浸つてみた。

子供の頃は、こんな生活思ってもみなかった。天人がいる世界なんて、考えられなかった。大人になっても先生の傍に居ようと…

突然の軽快なベルの音に、銀時は閉じていた瞼をゆっくり開いた。

少しぼやけた視線に、音の発信源である黒い電話が入る。

「はい、万事屋銀ちゃんです」

受話器を取り上げ、気だるい声で電話に出る。

「こんにちは銀さん。今大丈夫かしら？」

「おー、お前か。なんだ？」

掛けてきたのは新八の姉だった。ついでに彼の事を訊いてみるかと考えながら妙の用事を尋ねた。

「少し頼まれ事をして欲しいんですけど…」

「あ？頼まれ事？」

「ええ。さっきお庭を見てたら随分雑草が伸びてしまったみたいで…」

「草刈りしろってか」

「あら、話が早い。やってくれますよね、万事屋さんですものね」

ここで断ったら自分の身が案じられる。

「言っとくけど、従業員の身内だからって安くはしねえからな」

「わかってますよ。今日は銀さんのために甘い卵焼きをたくさん作りますからね」

どうやらお金の報酬受け取れないようだ。

銀時はかわいそうな卵を思い浮べながら肩を落とした。

「そついや、新八はどうしたんだよ」

「え、新ちゃんは…そっちにいないんですか？」

「まだ来てねえけど…」

「まあ、どうしたんでしょうね」

妙は他人事のように軽く流すと、一方的に話題を戻してしまった。

「それじゃ、夕方からでいいから忘れずに来てくださいね」

「あ、おい」

呼び止めたが、聞こえてきたのは機械音だけだった。

そして夕方、5時頃。

結局銀時は今までの時間をジャンプを読んだり、久しぶりに掃除をして過ごした。

一人分のためだけに作るのは気が引けて、食事はしなかった。

新八、神楽、定春はいつまで待っても万事屋に顔を出すことはなかった。

神楽のために新八の家に行くという旨の走り書きを残して家を出た。ガラリと戸を開けた時、挟まっていたらしい紙切れが足下に落ちた。銀時はそれに軽く目を通して懐にしまった。

恒道館道場

志村邸である。

到着した銀時は遠慮なく門をくぐった。

夕方の紅い日差しが庭を照らし、どこか寂しげに見える。まるで銀時の心を表している様だった。

乱暴に戸を叩けば、妙の明るい返事が返ってきた。

「今手が離せないんです。どうぞ上がって居間で待っててください
」！

「…邪魔するぞー」

ギシ、とたまに軋む廊下を進んで居間に向かった。

たどり着いた居間のピッタリと閉じられた襖をスツと開いた。

「お誕生日おめでとう……！！」

銀時を迎えたのはクラツカーの音と、賑やかな声だった。

突然の事に呆気にとられた銀時は、口をあんぐりと開けることしかできない。

「は、え？何やってんの…お前ら」

銀時が驚くのも無理はない。

志村邸の居間には、遊びに行ったはずの神楽、音信不通だった新八、呼び出した当人の妙に加え、桂と長谷川までもが顔を揃えて居ただ。

「銀ちゃん、忘れてるアルか？」

「今日は銀さんの誕生日じゃないですか！」

突っ立ったままの銀時の下に二人が駆け寄って笑顔でいった。

そっだ、今日は10月10日…

「忘れてた…」

「ははっ、銀さんらしいや！」

「全く…だからお前はいつまでも天然パーマなんだ」

長谷川の手元には既に酒の注がれたコップが置いてある。
桂は呆れたように首を振っていた。

「うるせえ!!!天パーは関係ねえだろうが!っーかなんでここに

居んの！」

「二人とも、お手伝いしてくれたんですよ」

机の上に皿などを並べている妙がそう付け足した。

「今日はご馳走ですよ！早くたべましょう！」

「そうアル！私お腹ペコペコネ！」

新八と神楽に促されて、銀時は腰を下ろした。

机の上には新八が言った通りにご馳走が並べられていて、中には焼死体の姿が確認できた。

「料理は僕がやるって言ったんですけど、姉上が手伝って聞かなくて…」

銀時の心中を察した新八がこつそりと耳打ちをした。

「新ちゃん、何の話をしてるのかしら？」

「い、いえ！！なんでも！」

「なあなあ、早く飲もうぜー！！」

「いや、アンタもう飲んでるでしょー！」

長谷川に急かされた新八は、ツツコミを入れた後、ゴホンと咳払いをした。

「それじゃ、銀さんの誕生日を祝して！！セーの」

「かんぱーい！！」

「ハッピーバースデー！！」

「おめでとう！！！！」

「いったただっきまーす！！」

「メリークリスマス！！！！」

それぞれのコップがぶつかり音を立てた。

「バラバラじゃねーか！！！！誰だメリークリスマスだった奴は！！」

「ん、違ったのか？」

銀時の問いかけに、早速料理を頼張っていた手を止めた桂が首を傾げた。

「違いよ！さっきまで何を聞いてたんですかアンタは！！」

「どうでもいいーじゃねーかよー！銀さんもヅラッチもどんどん飲もっせー」

「っっっせえ酔っぱらい！！！！」

「ツラツチじゃない桂だ！」

へらへらと笑いながら酒を飲む長谷川を二人は同時にはたいた。

「みなさん、お酒もいいですけどお料理も冷めないうちに食べてくださいね」

妙が焼死体の盛られた皿を掲げる。

銀時はそれを見て血の気が引くのを感じた。

「銀ちゃん銀ちゃん、これ食べてみるネ」

隣に座る神楽が銀時の裾を引っ張りながら、ハンバーグをさした。

銀時は返事をしてそれを口に運ぶ。

少し焦げ味がしたが、なかなかの味だ。

「うん、美味えよ」

「マジアルか!？」

「よかったね、神楽ちゃん」

新八の言葉に嬉しそうに頷く神楽。

「このハンバーグ、神楽ちゃんが作ったんですよ」

「マジでか。神楽オメー料理上手くなったなア」

「新八のおかげヨ！」

頭を撫でてやると、神楽は新人に笑顔を向けた。

「おう、盛り上がってるみてーだな！」

しばらく賑やかにやっているのと、庭先から声が聞こえてきた。

そこに居たのはゴリラ率いる真選組メンバーだ。

「まあ大変。動物園からゴリラが逃げ出してるわ」

妙はゴリラの姿を見て驚いたように声を上げた。

「何しに来たんだよ、マヨネーズなら間に合ってるぞ」

「うるせーよ、俺だって来たくて来たわけじゃねえんだ」

顔を合わせるなり睨み合う土方と銀時。

「んだよこのハンバーグは、焼きすぎじゃねーか。焦げ味がするぜ
」

「ああッ！！てめえ！なに勝手に食ってるアルかアア！！！！」

いきなりケンカを始める神楽と沖田。

…他一名

「ちよつと待てエエエ！！なんで俺の紹介だけ省かれてんの！？地味だからか！？」

とつつこんた山崎たちは上がり込んで腰を下ろす。

「俺たちも参加させてもらうぞ」

「嫌だよ。帰れ」

銀時は鬱陶しそうに手を振ったか、真選組は勝手に飲食を始めてしまった。

「そんなこと言っていないんですかい旦那。アンタが飲んでるその酒、一体誰が持ってきてやったんでしょうねエ」

沖田の言葉に言葉を失った銀時は、自分のコップと新八を交互に見た。

「実は、お酒が沢山あった方がいいと思って近藤さんに持ってきてもらったんです。うちにも限度があるんで…」

「そーゆーわけだ。こいつは元々俺たちの酒なんだよ。俺が飲もうと文句はねえだろ」

苦笑いで言った新八の後ろから、勝ち誇った笑みを浮かべた土方が、コップを見せつけながら言った。

「…もー好きにしるよ」

何を言っても仕方がないと思った銀時は、息を吐いた。

「ねえ銀ちゃん。今日はビックリしたアルか？」

ふとご飯を掻き込む手を止めた神楽が、銀時にそんなことを訊いてきた。

「おう、朝起きたら誰も居なかったからな」

「私、頑張って早起きしたネ！」

「神楽ちゃん、張り切ってたもんね」

「新八だって、昨日の夜からメシの下ごしらえしてたアルよ」

二人は、お互いに頑張ったところを挙げながら誉めあっている。

「新八、神楽」

そんな二人を見ていた銀時は、それぞれの頭に手を乗せて静かに呟く。

「……ありがとうな」

二人は一瞬顔を見合わせた後、くすぐったそうに微笑んだ。

「本当にお前らには、色々貰ってばっかだな」

傍にすることが当たり前。

幸せが当たり前。

きつともつ、そう簡単には手放せなくなっている。

「……何言ってるんですか銀さん」

「そうヨ、そんなの…私達も同じネ」

お互いに与えて、貰って…

「銀さんだって、僕らに沢山のものをくれてますよ」

「もちつもたれず、アル！」

それが…

「それが万事屋かぞく…でしょ」

二人に微笑みかけられた銀時は、頭を掻きながら照れくさそうに頷いた。

「…そうだな」

銀時の誕生日パーティーはどんどん盛り上がっていく。

妙に殴り飛ばされる近藤…と意気投合している桂、ではなくキャプテンカッラ。

いつの間にか愚痴こぼし大会を始めた新八と山崎。戦闘体制の神楽と沖田。

巻き込まれる土方。

しばらくそれらを見つめた銀時は、フツと微笑んだ。

これから、もうすぐ。
…できなはずと。

家族は生涯の宝物（後書き）

もうちょっと続きますWWW

投稿は夜になります（、、ゞ

友達も生涯の宝物（前書き）

遅くなつてすいません（、、）

この話で完結です。

友達も生涯の宝物

すっかり夜も更けた志村邸の居間には、はしゃぎ過ぎて疲れてしま
い雑魚寝をしている万事屋、真選組等といったパーティーをしたメ
ンバーがいた。

その中で、一人の影がむくりと起き上がる。

銀時は少し痛む頭を押さえながら、寝ている者を踏まないようにと
気を遣いながら居間を出た。

時刻は夜11時過ぎ。

早いうちからどんちゃん騒ぎをしていたせいか、まだそこまで遅い
時間ではなかった。

酔いをさます為に洗面所で顔を洗った銀時は、冷水を飲む。
驚いたことに、酔いは浅いようだ。

月明かりに、懐から取り出した紙を照らす。

そこに書かれた内容を確認して、玄関に向かった。

「出掛けるのか？」

ふいに後ろから声をかけられた。声の主は桂だ。

銀時は特に驚きもせず、靴を履きながら答える。

「まーな」

「そうか…俺も真選組の奴らが目を覚ます前に帰らねばな」

「へマすんなよ。お前バカだから」

未だに背を向けたままの銀時の言葉にフンと鼻を鳴らした。

「…俺の分もよろしく言っておいてくれ」

「…何の事だよ。じゃーな」

軽く手を上げて別れを言った銀時は、静かに戸を開けて志村邸を後にした。

家を出た銀時は、真っ直ぐかぶき町を流れる川の方へと向かった。その川に掛かる橋の下に、彼の目的地があった。

橋の下にある小さな屋台には、既に一人の客の姿があった。銀時は腰にさした木刀に手を掛け、ゆっくりとその背中に近づく。

すぐ後ろまで迫ったところで、客の男が声をかけてきた。

「おいおい、そんな物騒なモンしまえよ」

「…何のマネだ、高杉」

警戒心を解かずに、低い声色で言った銀時に男…高杉は乾いた笑い声をこぼした。

「まあ座れや。ゆっくり話をしようじゃねーか」

高杉の言葉で、ようやく銀時は腰を下ろした。

高杉からは殺気が感じられなかったのだ。

「ずいぶんと来るのが遅かったなア、先に飲んでたぜ」

高杉はそう言って、新しい猪口に酒を注いで銀時に寄越した。

そう、高杉が銀時を呼び出した張本人だったのだ。

「…高杉、てめえ…何がしてえんだよ」

「飲めよ。話はそれからだ」

高杉に急かされ、銀時は渋々といった様子で猪口に口をつけた。

「…俺が率いてる鬼兵隊に居るまた子っつー女がこんなものを買ってきてなア…」

「それは…」

高杉は懐から何かを取り出して、机の上に置いた。

銀時はそれを見るなりすぐに反応を見せた。

手のひら程の大きさの莓大福に、見覚えがあつたからだ。

「懐かしいだろう？こいつを見たらお前の事を思い出してよ、こうして話がしたくなつたわけだ」

「…つたく、オメーは本当に気ままな野郎だな。この前の事、忘れたわけじゃねえだろ？」

「ククツ…忘れるわけあるめーよ。だが、たまにはいいだろう」

銀時はほとほと呆れてしまい、無言で酒を口にした。

大福か…

高杉が持ってきてきて莓大福はごく普通の、和菓子屋の老舗で売っているものだった。

しかし、この二人…吉田松陽の下で幼い頃を過ごした銀時と高杉、それから桂にとっては特別なものだった。

「確かに、懐かしいな…」

昔は3人で取り合うまで食べた。

今日はおめでたい日ですよ。

みんなでお大福をたべましょう。

銀時が初めてこれを食べたのは、松陽と出会った日。
初めて友達が出来た日。

誕生日を貰った日。

10月10日、まさに今日だった。

幼い頃の銀時は、年齢や生まれ土地など自分の事が何一つわからなかった。

そこで、銀時を拾った松陽がこう提案したのだ。

「無いのなら作っちゃえはいいんですよ。誕生日が無いとお祝いが

できないでしょう?」

ふわりと頭に乗せられた、温かく大きな手。

「決まりです。あなたの誕生日は今日、10月10日ですよ」

お誕生日おめでとう、銀時

気が付いたら、銀時は自然と大福に手を伸ばして包みをはがしていた。

一口頬張れば、甘い香が口に広がる。

「やっぱり、うまいわ」

あの日と同じ味。

「だろうなア」

全く同じ、甘くて優しい味だった。

「なア、銀時…」

高杉が、4つ目の徳利を空にして呟いた。

「たまに思うんだがよオ…俺は今こんな道を進んでるが、間違っちゃいねえのかってな」

銀時は黙って話を聞いていた。

「もし今の俺を先生が見たら、なんて思うだろうな……」

「……んなこと、知るかよ。俺は先生じゃねえんだ」

少しの沈黙のあとの銀時の返事に、高杉は小さくため息をついた。それを見た銀時がそのまま続けた。

「でもまあ、アレだろ。先生ならきつとテーマの決めた道を真っ直ぐ進めてりゃ、迷わず進めてりゃ喜ぶんじゃないの？」

銀時は手にした徳利の酒を自分の猪口に注ぎ、そのまま高杉の猪口にも注いだ。

「例えそれがどんな道でもな……」

「……そう思うか？」

「ああ」

「……フン」

鼻で笑った高杉は一気に猪口の酒を飲み干して、徳利の脇に金を置くと立ち上がった。

「見るよ、銀時」

空を見上げた高杉に声をかけられた銀時は同じように空を仰いだ。

「今日もまた見事な月だ。お前さんの事を祝ってるんだろっよ」

「……今度会つたら容赦しねえからな」

「そいつぁ楽しみだなア」

嘲笑う様に言った高杉は、煙管を吹かしながら歩いていった。

「あ、ヅラがお前によくってよ」

忘れるところだった、と銀時は桂の伝言を早口で高杉の背中に伝えた。

「…次会うまでに頭のネジを締めておくように言っておけ」

銀時は苦笑いをしながら酒を飲み干して、店を出ようとした。

「ちよつとちよつと旦那っ！」

そんな銀時を止めたのは、屋台の主人だ。

「あ？何よ」

「何って、お代！！まだ貰ってないですよ」

「金ならさつき高杉のヤローがそこに…」

置いていたのを見ていた銀時は、カウンターを指した。

「でもこれは、あの旦那の分しかありませんよ」

「はあ？あのヤロー…」

誕生日くらいおごってくれてもいいじゃねーか。

銀時はため息をついて懐を探った…が、ない。

財布がないのだ。

「え、ちょっと…冗談じゃねーぞオイ…」

「旦那…アンタまさか…」

「いや、待て待て…：…ちょ、高杉くん…！！…待って！本当に！頼むから！！三百円あげるから！あ、財布ねえんだった」

銀時は急いで高杉を追いかけてしようとしたが、既に彼の姿は消えていた。

「高杉のヤロー！ぜってえぶつ殺す…！！…！！」

深夜の川原に、銀時の叫びが木霊した。

それを聞いた高杉は、不適な笑みを浮かべながらしっかりと自分の道を進んでいったのだった。

友達も生涯の宝物（後書き）

＼（＾Ｏ＾）／

高杉のキャラがイマイチ上手く書けないorz

あと、高杉の誕生日小説は事情があって書けませんでした…

すまん高杉！！

来年こそは！！！！

グダグダですいませんでしたm（――）m

感想もらえると嬉しいです！

最後に、ハッピーバースデー銀さん！！（*´、*´）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2296o/>

人生で得る宝物の数は沢山

2010年10月14日09時30分発行